

山頭火ふるさと館報

第9号
令和4年10月

いあごんり

一般社団法人防府観光コンベンション協会

山頭火ふるさと館

館長 中村 浩典

秋空が高く澄み渡り、秋の訪れを感じる季節となりましたが、皆様にはますますご清祥にてお過ごしのことと拝察申し上げます。

平成二十九年十月七日に開館しました「山頭火ふるさと館」ですが、今年で開館五年目を迎えております。開館当初は、(公財)防府市文化振興財団を指定管理者としてスタートを切りましたが、令和三年四月からは、(一社)防府観光コンベンション協会に指定管理者が移行し、文学館としての機能に加えて、防府市の文化観光拠点施設としての役割も担いながら、交流人口の倍増をめざして日々の運営に尽力しているところであります。おかげをもちまして、入館者も徐々に増え、山頭火を柱とした「つながり・交流」も広がっております。

九月四日には、来館される皆様を歓迎す

るための館入口へのアプローチ装飾(門柱)も完成し、新たな名所として注目を浴びています。

さて、今年は、防府の生んだ漂泊の俳人「種田山頭火生誕一四〇年」の年でもあり、これを記念して九月四日から十二月五日まで、特別企画展「山頭火と芭蕉・良寛」を尊敬した先人たち」を開催しております。山頭火は、其中庵時代に東上の旅に出ています。この旅は山頭火が晩年に行った、命を削りながらの大旅行でした。立派な先人の足跡を辿りながら、自分のこれからの道を確立したいと考えての旅でした。今回の特別企画展では、種田山頭火が尊敬し、その生き方に影響を受けた先人、中でも漂泊の俳人として句も愛読していた松尾芭蕉や、禅僧かつ俳人として意識していた良寛等を取り上げ、その俳句や生き方から山頭火がどのような影響を受けていたのか、貴重な直筆資料とともに紹介しています。県内では滅多に見ることのできない貴重な資料等を展示しておりますので、多くの皆様のご来館をお待ちしております。

なお、周年記念イベントとして、十月七日から九日までの三日間で「山頭火ふるさとまつり」、また、十一月十二日には「記念講演会・句会」を開催するほか、特別企画展開

目次

館長挨拶	1
企画展 山頭火と衣食住	2
山頭火・自由律句講座	2
天神山公園で自然観察&句作	3
寄稿 山頭火とアブラムシ	3
山頭火の妻サキノの手紙	4
親子ワークショップ	4
第四回フォトコンテスト	5
図書・資料受け入れ報告	5
収蔵資料紹介	6
今後の企画展・イベント情報	7
今月の一句アーカイブ	8

催期間中には「ふるさとシールラリー」山頭火の句碑をめぐる」を展開しており、皆様に楽しんでいただきたいと考えております。詳しくは当館ホームページをご覧ください。

これからも、地域の皆様が、親しみやすく心豊かになれる施設をめざしてまいりますので、今後とも山頭火ふるさと館への変わらぬご支援、ご協力を賜りますようお願い申し上げます。ごあいさつとさせていただきます。



▲9月4日に完成したアプローチ装飾(門柱)

企画展 山頭火と衣食住

開催期間 令和四年三月十八日(金)

～八月二十八日(日)

旅する俳人として知られている種田山頭火は、大正十五年～昭和七年九月までは旅を住みかとし、昭和七年九月から昭和十五年十月に亡くなるまでは庵を構えて暮らし、暮らした。そのような生活の中で山頭火はどのような暮らしをしていたのでしょうか。庵ではどのような暮らしをしていたのでしょうか。庵ではどのような暮らしをしていたのでしょうか。

前期では「衣」「食」に焦点を当て、日記や俳句等から紹介しました。修行僧としてのいでは山頭火の旅を支える重要なものであり、特に草鞋や笠については句にも多く詠んでいます。また質素な食生活を続けた山頭火は、質素だからこそ「何を食べてもうまい！」と食べることに幸せを感じており、多くの食に関する句を残しています。

後期には「住」に焦点を当ててご紹介しました。小郡の其中庵、湯田の風来居、松山の草庵等は小さな庵でしたが、その周辺の風景ごとそれぞれの庵を好み、庵での生活や庵の様子についても様々な句を詠んでいます。

これらの俳句や日記等を通じて、山頭火がひとりの人間としてどのような生活を送っていたのかご覧いただきました。

【展示資料一覧】

半襖(ころすなほに御飯がふいた)(種田山頭火書・護国寺蔵・前期)／複製版第六句集『孤寒』(種田山頭火・昭和十四年)／複製版第七句集『鴉』(種田山頭火・昭和十五年)／第四句集『雑草風景』(種田山頭火・昭和十一年)／第五句集『柿の葉』(種田山頭火・昭和十二年)／白衣(護国寺蔵・前期)／法衣(護国寺蔵・前期)／絛子(護国寺蔵・前期)／短冊軸装『鉄鉢の中(も霞)』(種田山頭火・前期)／第三句集『山行水行』(種田山頭火・昭和十年)／複製版第一句集『鉢の子』(種田山頭火・昭和七年)／複製版第二句集『草木塔』(種田山頭火・昭和八年)／色紙『まつたく雲がない笠をぬぎ』(種田山頭火・後期)／短冊軸装『其中庵 住めば柿の実の赤くして』(種田山頭火・後期)／短冊『ひとりひっそり竹の子竹になる』(種田山頭火・後期)／短冊『空へ若竹のなやみなし』(種田山頭火・後期)／掛軸『其中雪ふる一人として火を焚く』(種田山頭火・後期)／短冊『わら屋ふるゆきつもる』(荻原井泉水・後期)／ランプ(山口市小郡文化資料館蔵・後期)



▲前期展示風景

▼後期展示風景



山頭火・自由律句講座

山頭火を学ぶ会(前期六月～十月)

毎月第三水曜日開催

今年度は「其中庵時代」をテーマに、当館館長による「山頭火の生涯」、防府図書館司書の花田咲絵先生による「其中庵時代の旅」、当館学芸員による「其中庵時代の句」の座学のほか、護国寺住職を講師とした拓本体験や、其中庵の見学を実施。山頭火を学ぶために多くの方が集まっています。

自由律句を学ぶ会(前期六月～十月)

毎月第二水曜日開催

令和四年度は昨年度に引き続き富永嶋山先生を講師にお迎えし、これまでに六月から計四回開催しました。事前に受講生が詠んだ自由律俳句を講師が添削し、受講生の方も他の方の句を添削して、句の内容を想像して発表するなど、チャレンジ精神をもって取り組まれています。

自由律句で遊ぼう(通年)

毎月第四土曜日開催

本講座は門田美和子先生を講師にお迎えし、小中学生を対象に自由律俳句について楽しく学ぶ講座です。令和四年度はこれまでに六月・七月・九月の計三回開催しました。山頭火について積極的に学んだり、句作に悩みながら挑戦したり、山頭火カルタで盛り上がるなど、活発に活動しています。

天神山公園で 自然観察&句作

日時 五月二十一日(日)
講師 原田誠大(ソラール学芸員)

高張優子(山頭火ふるさと館学芸員)

天神山公園で自然を観察しながら、自然を詠んだ山頭火の句を味わうイベントを開催しました。当日は楠、サツキ、蝶、どんぐり、桜、たんぽぽ、アブラムシなどを観察し、同時にそれらを詠んだ山頭火の句を味わいました。科学と文学それぞれの視点をとおして自然を楽しんでいただけたと思います。

散策後は、自由律俳句の句作に挑戦しました。頭を悩ませながらも、天神山公園で見えて感じたものを素直に表現されていました。参加者の皆様が詠んだ句を一部ご紹介します。

すかんぼの赤い葉 春だ

天神さま紅葉揚羽を遊ばせて

山頭火の句碑をてふてふ一廻り

杜しづか黄てふ梢を渡りゆく

寄稿 山頭火とアブラムシ

防府市青少年科学館ソラール
原田 誠大

こんにちは。私は防府市青少年科学館ソラールで学芸員をしています。原田誠大と申します。このたびは、山頭火ふるさと館の高張学芸員とともに、「天神山公園で自然観察&句作」というイベントを実施しました。

実はお話をいただく以前から、私の専門である自然史と山頭火の句は相性が良いのではないかと考えていました。山頭火の句には、草花や昆虫など小さな生き物たちが多く登場します。また、山頭火は漂泊の俳人として知られ、各地を旅した日記とともに記された句もありません。ここから、句の読まれた時期や場所などの情報が分かれば、題材となった動植物の種類が絞り込めるかもしれません。

こうしたアイデアを持ち寄って高張学芸員と打ち合わせた結果、自然観察と吟行を組み合わせたイベントをやるう、ということになりました。その下見や準備をする中で、面白い発見がありました。天神山のモミジの葉を、ために揺すってみた時のことです。下で構えていた白い布の上に、体長5mmほどの小さな昆虫が多数落ちてきました。群れで植物の汁を吸って暮らしている「アブラムシ」の仲間です。高張学芸員に伝えたところ、「アブラムシを詠んだ句がありますよ!」とのお返事が。山頭火は本当に、小さな生き物をよく見ていたん

だな、と私は心の中で感動しました。その後、紹介してもらったのが次の句です。
「あぶらむし、おまへのひげものびてある」
アブラムシの仲間には、自分の体よりも長いひげ(触角)を持つものがいます。肉眼で見極めるとは、なんとという観察眼でしょうか。さらに、こんな句もありました。
「米櫃をさかさまにして油虫」

なるほど。イネにつくアブラムシはいます。果たして米櫃から出てくることがあるのだろうか…。そこまで考えたところでようやく気が付きました。山頭火の詠んだ「アブラムシ」の正体に。多くの人にとつて嫌悪の対象であるあの虫も、どこか憎めない句にしてしまう。そんなところに、山頭火の何とも言えないやさしさを感じました。

このようなエピソードを話していると、当日は瞬く間に時間が過ぎ、予定時間を大きくオーバーすることに。運営側としては反省点も残るイベントになってしまいました。少しでも山頭火や自然の魅力が伝えられれば嬉しいです。



▲アブラムシの一種

山頭火の妻 サキノの手紙

開催期間 令和四年三月十八日(金)
〜令和五年四月九日(日)

(特別企画展開催のため、令和四年八月二十九日(月)〜十二月九日(木)は休止)

種田家の長男・正一は、明治四十二年に和田村高瀬(現在の周南市高瀬)の佐藤家長女・サキノと結婚しました。大道村で酒造場を営んでいる頃でした。

その後、酒造場が破産し、山頭火は妻子とともに熊本へ移ります。古書店『雅楽多』を経営し始めますが、山頭火は俳句に熱中しており、ついには妻子を置いて上京しました。その状況を見て、サキノの実家の両親や義兄が山頭火に離婚届を送り付け、大正九年、山頭火とサキノは離婚することになりました。山頭火に振り回され女手一つで息子を育てることになったサキノですが、再婚することはない、さらに山頭火没後も俳人・種田山頭火の妻であった女性として生きています。

今回はサキノが実家に宛てて書いた葉書を、生まれ育った高瀬が宿場町として栄えていた大正時代の様子とともにご紹介しています。

【展示資料一覧】

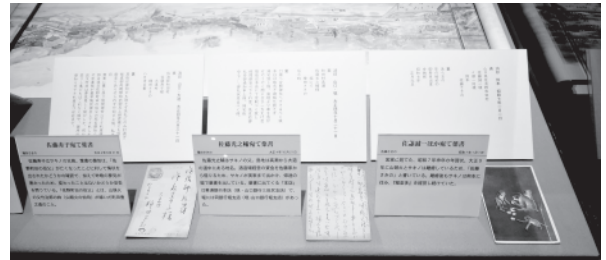
佐藤寿子宛葉書(種田さきの・大正四年八月三十一日)／佐藤光之輔宛葉書(種田さきの・大正四年十月二十一日)／佐藤誠一・御一同宛葉書(佐藤さきの・昭和七年一月一日)／絵図「大正時代高瀬懐古図」(山田邦生・平成七年)

親子でワークショップ オリジナル思い出の句 うちわを作ろう!

開催日 令和四年七月三十一日(日)
八月二十七日(土)

八月二十七日(土)

本ワークショップでは夏休みをテーマに、夏休みの思い出や、夏休みにやりたいことなどを自由律俳句にして、それをうちわに書いて周りを飾ってオリジナルのうちわを作りました。



▲「山頭火の妻サキノの手紙」展示の様子

初めに自由律俳句についての教室があり、定形俳句との違いを参加者の皆様に知っていただきました。まだ俳句を習っていない参加者も保護者の方と一緒に自由律俳句を学び、山頭火の句を参考にしながら思い思いに夏の思い出の句を、定形のリズムにならないよう苦戦しながら作りました。

句作のあとはうちわに句を書き、周りを絵や折り紙等で飾りました。お友達とお祭りに行った思い出の絵を丁寧に描いたり、夏休みの間に育てたお花の絵を描いて周りにセロファンを貼ったりするなど、個性豊かな手法でうちわを飾りつけていました。

早く終わった人にはうちわの裏面にも思い出の句と絵で素敵な作品を作っていたいただき、リバーシブルで楽しい思い出が見られる作品ができあがりしました。

▼自由律俳句についての説明を真剣に聞いています



第四回山頭火ふるさと館
フォトコンテスト

募集期間

令和四年四月一日(金)～七月三十一日

(日)

審査員

鰐石洋己

入江孝治

櫻井宏明

中村浩典(敬称略)

表彰式

令和四年九月十日(土)

展示

令和四年九月十一日～十月中旬

昨年度に引き続きフォトコンテストを開催し、山頭火の句をテーマにした写真作品を募集しました。県内外からプリント部門四十三点、メール部門十三点の応募があり、その中からプリント部門十点、メール部門五点が受賞及び入選しました。また、審査後の九月十日に表彰式を開催し、翌日から受賞作品の展示を行いました。現在受賞作品は当館ホームページの企画展・イベント欄に掲載しています。受賞結果は次のとおりです。

プリント部門

【最優秀賞】

富田 弘子(山口県)

「水はみな音たつる山のふかさかな」

【優秀賞】

吉野 由恵(山口県)

「かうしてここにわたしのかけ」

【佳作】

内山 えいじ(山口県)

「やぐらやぐらやぐらやぐらやぐらちるさくら」

廣中 作次(山口県)

「海よ海よふるさと海の青さよ」

大脇 雅志(岡山県)

「夕立晴れるより山蟹の出でてきてあそぶ」

【入選】

石川 裕樹(山口県)

「こんなにもうまい水があふれてゐる」

井上 均(山口県)

「泊ることにしてふるさとの葱坊主」

広田 和夫(山口県)

「岩かげまさしく水が湧いてゐる」

稲子田 光男(山口県)

「労れて戻る夜の角のいつものポストよ」

河野 孝文(山口県)

「いつも一人で赤とんぼ」



プリント部門

メール部門

【最優秀賞】

豊嶋 有里(愛媛県)

「大楠の枝から枝へ青あらし」

三戸 律子(山口県)

「向日葵や日ざかりの機械休ませてある」

【優秀賞】

岡川 清吾(山口県)

「何が何やらみんな咲いてゐる」

【入選】

堀 将大(岡山県)

「やつと霽れて若葉あざやかなかたつむり」

近藤 博明(広島県)

「よう燃えてよう炊けてうつくしい空」

図書・資料受け入れ報告

令和四年二月から八月までの間に寄贈いただいた資料をご紹介します。

寄贈

田中健次様より『日本文学全集の現代句集』(荻原井泉水)、乃村工藝社様より『種田山頭火句集 復刻版』(種田山頭火)、前田好昭様より肉筆画「山は枯れている」肉筆画「あふれる朝湯」(秋山巖)

御著編書

「青穂」事務室様『青穂』四十三号、四十四号、四十五号、富永鳩山氏『自由律俳句クラブ群妙』第三十二号



収蔵資料紹介

紹介する資料三点は、椋鳥会の回覧雑誌の中から山頭火が互選した句を書き付けたものである。

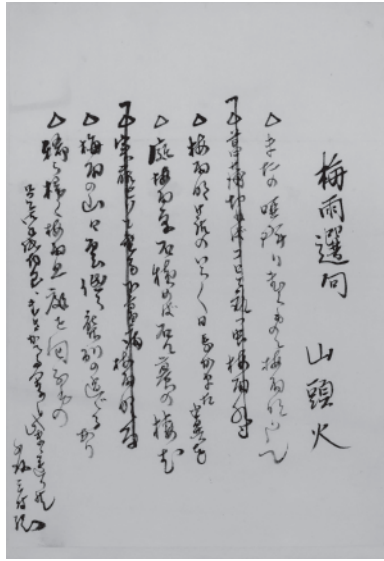
凡例

一、翻刻は原則原文どおりとしたが、読みやすさを考慮し、適宜句読点を補った。
一、旧字体は新字体に改めた。

一 梅雨選句 山頭火

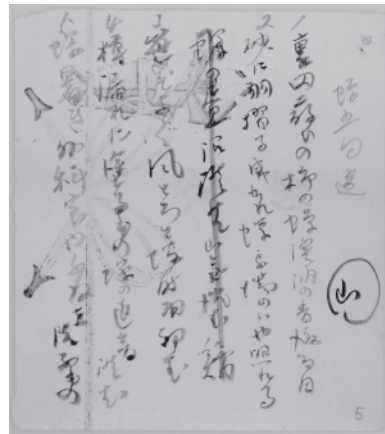
- △またの唾降り書くものに梅雨明りして
 - △草蒲切れば中と落つ虫梅雨水に
 - △梅雨明け店のいらく日馬かまた糞を
 - △庭梅雨草石積めば石に臺の棲む
 - △実藤ヒヤと垂る下草蒲梅雨明る
 - △梅雨の山々雲低く葬列の過ぐるあり
 - △稀ら掃く梅雨旦庭を匂ふもの
- 御手紙切□、書きかへる間なし。此のまゝ送り候

午後三時記



二 蝉五句選 山

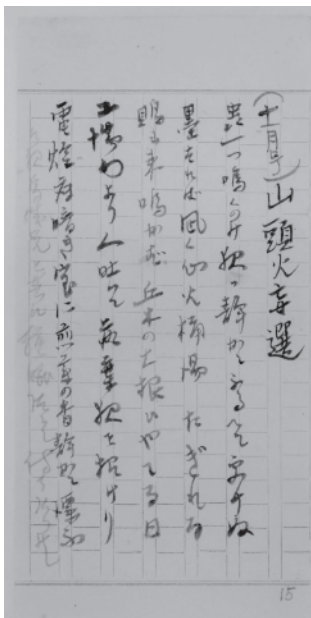
- 1 裏田蔽ひの柿の蝉漁油の香渡る日
- 2 砂に羽摺る曳かれ蝉馬場のいや照れる
- 3 笹そよぐ風とろと蝉時雨初む
- 4 樽漏れに塗るもの蝉の遠音澄む
- 5 蝉暑き外科室や午後を洗ふもの



三

(十一月号)山頭火妄選

虫一つ鳴くのみ夜は静かにふるへて更けぬ
墨すれば風ぐ心火桶湯たぎれる
鴉も来鳴かず丘木の大根いやてる日
工場町より人吐いて落葉夜を招けり
電燈薄暗き窓に煎薬の香静かに漂ふ
今夜烏城兄と共に鐘眠居にて待ち居り候



解説

山頭火が大道時代に参加していた俳句結社「椋鳥会」の回覧雑誌『五句集』では、作者名を伏せたうえで句を互選していた。当該資料は山頭火が選句をし、幹事に送った資料である。幹事はこれらを集計して得点を計算したようである。

一「梅雨選句」は、大正二年六月の『五句集 梅雨』掲載の句から選んだものである。『五句集 梅雨』を見ると、山頭火が選んだこれらの句の作者は順に江良碧松(田布施)、浴永不泣子(防府)、江良碧松、石川桃花水(防府)、久保破口桂(平生・のちの白船)。見せ消ちのようになって二句はどちらも碧松の句である。

『五句集 梅雨』によれば、これらの句の得点は順に三点、二点、一点、二点、二点、二点。なおこのときの最多得点は山頭火で、それに次いで多かったのが、山頭火も二点入れている碧松であった。

二「蝉五句選」は、大正二年七月の『五句集 蝉』掲載の句から選んだもので、順に久保破口桂、久保破口桂、白雨(居住地不明)、河村黒船子(徳山)、斎藤鐘眠(防府)の句である。見せ消ちになっているのは破口桂の句。

『五句集 蝉』によれば、これらの句の得点は順に四点、四点、三点、四点、一点。このときの最多得点は、山頭火も二点入れている破口桂だった。

『五句集』はそれぞれの句に互いに句評を書いていた時期もあったが、『梅雨』『蝉』の頃は批評を書く欄がなくなっている。

三「山頭火妄選」は、十一月号と書かれているが、現在内容が分かっている『五句集』では確認できない。五句の後の一文は選句とは関係なく、幹事に対して今夜鐘眠居に集まろうと誘っている。(当館学芸員・高張優子)

今後の企画展情報

種田山頭火生誕一四〇年・山頭火ふるさと館開館五周年記念特別企画展

「山頭火と芭蕉・良寛

〜尊敬した先人たち〜」

前期 開催中〜十月二日(日)
後期 令和四年十月七日(金)

〜十二月五日(月)

山頭火が生きていた時代から長い時間が経った今も、その句は新鮮さを失っていません。その背景には実は、芭蕉や良寛等の先人たちへの意識がありました。彼等の句や生き方から山頭火がどのように影響を受けていたのか、貴重な直筆資料とともに紹介します。

企画展「防府市内山頭火顕彰の歴史」

令和四年十二月十日(土)

〜令和五年四月九日(日)

山頭火句碑建立にはじまり、全国的な山頭火ブームとともに旧山頭火ふるさと会の活動によって盛り上がりを見せた、防府市内における山頭火顕彰の歴史をたどります。



今後のイベント情報

山頭火ふるさとまつり

十月七日(金)、八日(土)、九日(日)

山頭火ふるさと館開館5周年を記念して、まつりを開催します。大人も子どもも楽しめるイベントが盛りだくさん！まちの駅うめてらすでも期間中に当館とのコラボプレゼントやイベントがあります。

七日(金)

◇山頭火句入りタンブラープレゼント！

(先着二〇〇名様)

◇ふるさとシアターDVD特別上映

『きょうも隣に山頭火』

(作：井上智重、作曲：出田敬三)

八日(土)

◇あつまれちびっ子！山頭火クイズ大会

◇くるみボタン作り

◇山頭火紙しばい(書道コンクール表彰式内)

九日(日)

◇語り継ぐ山頭火

山頭火朗読会(山口の朗読屋さん)

詩吟句碑巡り(防府桑誠会)

◇句碑拓本ワークショップ

(講師：水落龍勝さん)

◆印のイベントは事前申し込みが必要ですが、詳しくは当館ホームページをご覧ください。

ふるさとシールラリー

〜山頭火の句碑をめぐる〜 第2弾

開催中〜令和四年十一月五日(月)

山頭火ふるさと館近辺の句碑をめぐるシールを集めよう。全部のチェックポイントを回った方の中から抽選で5名様に記念品プレゼントが当たるチャンス！



山頭火生誕一四〇年記念講演会・句会

「松尾芭蕉から種田山頭火へ」

日時 令和四年十一月十二日(土)

会場 ルルサス防府 多目的ホール

第一部 講演 「山頭火と芭蕉」

講師：坪内稔典

(俳人・公財) 柿衛文庫理事長)

幕間 防府ふるさとコールによる合唱

第二部 山頭火生誕百四十年記念句会

審査員：坪内稔典

富永鳩山

(自由律俳人、「群妙」主宰)

【現在参加者を募集中です】

電話またはメールにて山頭火ふるさと館までお申し込みください。メールの場合は「住所、氏名、連絡先」をご記入ください。

今月の一句アーカイブ

山頭火ふるさと館では毎月山頭火の句を一句選んで皆様にご紹介しています。これまでにご紹介した「今月の一句」をふり返ります。

令和四年

三月 飾窓の牛肉とシクラメンと

昭和七年三月

「飾窓」はショーウィンドウのこと。「牛肉」は肉屋で売られている精肉だと考えられます。シクラメンの色と霜降りの牛肉が、ふと見まがうように似て見えたのでしょう。全く異なるはずの二つのものが似て見えてくる、不思議な感覚が伝わってきます。

四月 草餅のふるさとの香りをいたぐ

昭和七年四月

昭和七年四月、長崎を歩いてきた頃の句です。「ふるさとの香」として山頭火に刻み込まれていた記憶が、平戸で懐かしさを感じる風景を堪能したあと、懐かしい香りのする草餅を食べたことでより強く思い起こされたのではないかと想像できます。

五月 生えて伸びて咲いてゐる幸福

昭和九年五月

「生えて伸びて咲いて」の部分では、「て」を用いて動詞を次々に続けることで、植物が成長していく様子を表現しています。さらに生きて

いることのありがたさを直接的に「幸福」という言葉で表現しており、山頭火の句の中でも非常に明るい句になっています。

六月 あるけば涼しい風がある草を踏み

昭和十五年六月

昭和十五年六月、松山での句。「涼しい風」を肌で感じながら自然の中を歩いていく、さわやかな情景が浮かびます。また、風が吹き抜けて草がそよぐ音や草を踏みしめて歩くやわらかな足音も聞こえてくるようです。

七月 明日は出かける天の川まつへ

昭和七年七月

昭和七年七月四日の句。眠れない夜更けにふと夜空を見上げ、明日の行乞について思いを巡らせている様子が表現されています。明日も出かける予定があるのに眠れないという少しの不安と、同時にその不安をも打ち消してしまふような星空の果てしなさが対比された句です。

八月 旅はいつしか秋めく

山に霧のかゝるさへ

昭和八年八月

この日山頭火は、小郡の其中庵から現在の美祢市秋芳町あたりまで行乞しています。「旅はいつしか秋めく」は、前日に其中庵で夏らしい日を過ごしたが、山に囲まれた秋吉台まで歩いてきて、いつの間にか景色が秋らしくなっていると気づいたのでしょう。山に霧がかか様子にも秋らしさを見出している句です。

山頭火ふるさと館のご案内

開館時間

午前十時～午後六時

(ただし、特別企画展の開催中は、展示室への入室は午後五時三十分まで)

休館日

毎週火曜日(祝日の場合は次の平日)

十二月二十六日～十二月三十一日まで

観覧料

無料

※なお、特別企画展を開催する際、観覧料を設ける場合があります。

アクセス

防府駅でんじんぐちから約一・五km

まちの駅「うめてらす」から約一〇〇m

山陽自動車道防府東・西ICより約七分

駐車場

普通車用三台、身障者等用二台(ふるさと館横)

無料観光駐車場二十五台(ふるさと館斜前)

山頭火ふるさと館報

第9号

令和4年10月1日発行

編集・発行

一般社団法人

防府観光コンベンション協会

山頭火ふるさと館

747-0032

山口県防府市宮市町5番13号

電話 0835-28-3107

FAX 0835-28-3113